

[研究論文]

シュパイヤー大聖堂の小型ギャラリー

—象徴的意味と宗教上の機能について—

The Dwarf Gallery of Speyer Cathedral

—A Study on Its Symbolic Meaning and Religious Function—

小倉康之

OGURA Yasuyuki

〈抄 録〉

ロマネスク建築を特徴づける建築要素の一つは「小型ギャラリー」である。中でもシュパイヤー大聖堂の小型ギャラリーは、最も美しく完成度の高いものとして名高い。本稿では、その象徴的意味と宗教上の機能についての考察を行う。これまではイタリアのロンバルディア地方が小型ギャラリーと盛期ロマネスク建築の起源であると言われてきた。しかし、トリーア大聖堂とシュパイヤー大聖堂では、ロンバルディア地方よりも半世紀以上も早くこの建築要素が用いられた。また、小型ギャラリーは単なる装飾的要素であると捉えられてきたが、皇帝崇拝や聖遺物の顯示の儀式と結びつき、宗教上・政治上の機能、および象徴的意味を有していたと考えられる。

キーワード：シュパイヤー大聖堂、小型ギャラリー、小人ギャラリー、ロマネスク建築

Abstract

One of the architectural elements that characterize Romanesque architecture is the dwarf gallery. Among them, the dwarf gallery of Speyer Cathedral is famous for being the most beautiful and complete. In this paper, I consider its symbolic meaning and religious function. It has been said that the Lombardy region of Italy was the origin of dwarf galleries and high Romanesque architecture. However, this architectural element was used in the Cathedrals of Trier and Speyer more than half a century before Lombardy. I presume that the dwarf galleries, which have been regarded as merely decorative elements, had religious and political functions and symbolic meanings associated with the rituals of worshipping the emperor and the revelation of holy relics.

Keywords: Speyer Cathedral, Dwarf Gallery, Romanesque Architecture

はじめに

1024年に即位したドイツ王、ザリエル朝初代神聖ローマ皇帝コンラート2世は、祖先から受け継いだ一族の本拠地であるシュパイヤーの街に、大規模な司教座聖堂（図1）を建てさせた。第1次シュパイヤー大聖堂は、ハインリヒ3世の時代を経て、1061年、ハインリヒ4世の幼少時代に献堂されたと考えられている。しかし、コンラート2世とハインリヒ3世による第1次シュパイヤー大聖堂は、完成後わずか20年ほどで取り壊され、皇帝ハインリヒ4世と建築家ベンノーによる第2次シュパイヤー大聖堂に取って代わられた、と言われてきた。1081年頃から行われたこの大規模な改築は『ベンノー伝 Vita Bennonis』¹⁾の記述に



図1 シュパイヤー大聖堂、南西側外観、1030年頃起工-1106年頃完成（装飾は未完）

基づき、ライン川に浸食された東側内陣の補修、もしくは浸食による破壊の危機に対する予防的措置が目的であったとする説が有力視されている²⁾。一方、1972年にはヴァルター・ハースがこの説に疑義を呈し、これに代わって「壁体補強説」を発表した³⁾。これは、内陣のトンネル・ヴォールトと第1次大聖堂の矩形プランのアプシスが構造的安定性を欠き、そのため壁体を補強する必要性が生じた、とするものである。しかし、これらの説を筆者は『美学』212号所収の拙論において否定し、ライン川によって浸食されたという事実はなかったとするシュミットの調査報告に基づいて新たな説を提示した⁴⁾。シュパイヤー大聖堂は河川の氾濫によって破壊されたのではなく、コンラート2世からハインリヒ4世までの三代、約80年（1030年頃～1106年）をかけて建設されたものであり、1046年頃、ハインリヒ3世によって大幅な設計変更が加えられたのだと考えるべきである。また、シュパイヤー大聖堂におけるアプシスの改築は、この建築の「皇帝霊廟」および「聖ステファヌス1世のマルチリウム」としてのシンボリズムと密接に結びつく、という仮説を提示した。

本稿では、シュパイヤー大聖堂を特徴づける建築要素として知られる「小型ギャラリー⁵⁾」が、従来考えられていたように、1080年代になってイタリアのロンバルディア地方から移植されたものではなく、1046年頃、すなわちハインリヒ3世の時代に、トリーアなどの古代遺跡を手本として、ラインラント独自の建築要素として導入されたものであることを指摘する。また、小型ギャラリーは単なる装飾的要素ではなく、宗教上・政治上の機能と象徴的意味を担ったものである、という新たな仮説を提示する。

1. 皇帝ハインリヒ3世とシュパイヤー大聖堂

1.1 皇帝墓所と聖遺物

筆者が『美学』212号所収の論文において主張したように、1080年代以降の建設工事が補修や補強ではあり得ないとするならば、この建築のクロノロジーにおいて、重大な変更の余地が生まれる。すなわち、シュパイヤー大聖堂における初期ロマネスクから盛期ロマネスク様式への変遷は、従来言われてきたように、1080年代以降ではなく、1040年代半ばにまで遡る可能性がある。なぜなら、シュパイヤー大聖堂の建設において、最も重要な変更を加えたのは、在位1039年から1056年、ザリエル朝第2代皇帝ハインリヒ3世であり、1040年代半ば以降、盛期ロマネスク様式を先駆する要素が頻出

しているからである。

ハインリヒ3世は、1039年に父である皇帝コンラート2世をシュパイヤー大聖堂に葬り、身廊東端部を皇帝墓所（図2）として定めた。コンラート2世の石棺を中心とする墓域・祭域は「ケーニヒスコア（王の内陣）」と呼ばれ、10ベイで計画された外陣のおよそ4割を占める大規模なものであったため、外陣を拡張する必要が生じ、10ベイ案から12ベイ案へと改められた。この時点で、西側部分は基礎からやりなおしており、この設計変更はシュパイヤー大聖堂において最も重要な改変であったとすることができる。大聖堂の主祭壇の前、司教座と信者席との間に俗人の墓が置かれるのは当時極めて異例のことである。以来、ザリエル朝および初期ホーエンシュタウフェン朝の皇帝一族がこの大聖堂の皇帝墓所に埋葬された。

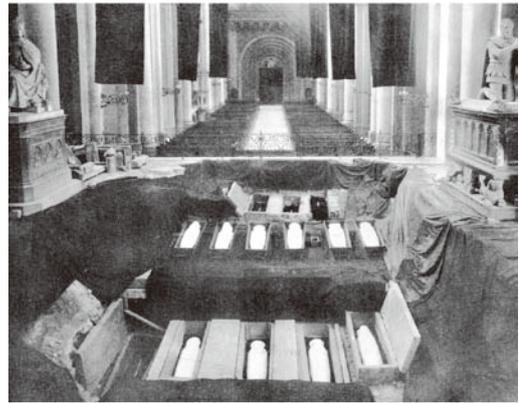


図2 シュパイヤー大聖堂の皇帝墓所、1900年に行われた発掘調査の際の記録写真、交差部より西側扉口を臨む

また、ハインリヒ3世は混乱の極みにあった教皇庁を改革し、1046年のストゥリ公会議において鼎立していた3人の教皇を罷免し、新たに改革派の教皇を任命した。そして、帰国後、ライン川流域の主要な司教座聖堂にイタリアから持ち帰った聖遺物を納めたとされている。この時、シュパイヤー大聖堂には聖ステファヌス1世の聖遺物がもたらされた。

ハインリヒ3世はなぜ「王の内陣」を司教座教会堂の中心部分に配したのだろうか。この問題については、『風土と文化』第4号所収の拙論⁶⁾において詳述したので、本稿ではその結論を述べるにとどめる。ハインリヒ3世はシュパイヤー大聖堂中心部の「王の内陣」において、皇帝の神格化に関わる儀式、あるいは聖職叙任の儀式を敢行しようとしたのだと推察される。

筆者は、こうしたハインリヒ3世の試みが、司教座教会堂としてのシュパイヤー大聖堂に、皇帝崇拜の儀式や聖遺物の顕示といった政治上・宗教上の機能や象徴的意味を新たに与えることになり、1046年頃から徐々に盛期ロマネスク様式へと移行していったのだ、と考える。

しかし、定説では、シュパイヤー大聖堂の主要部分はハインリヒ4世の時代、1080年代から1106年にかけて建設され、北イタリア、ロンバルディア地方の盛期ロマネスク様式を採り入れたものであると言われてきた⁷⁾。ハインリヒ3世の時代に建設された部分は、多くが洪水によって壊れたか、構造上の問題があったために取り壊されたとされてきたが、筆者はいずれも誤りであると考えている⁸⁾。

1.2 ハインリヒ4世とシュパイヤー大聖堂

ハインリヒ3世による皇帝主導の教会改革や中央集権の試みは急進的であったため、封建諸侯の反発を招き、後には教皇による非難の対象となった。1056年には、ハインリヒ3世が急逝し、幼王ハインリヒ4世がわずか6歳で即位した。摂政であった母后アグネスは、おそらく皇帝の求心力を維持するため、聖俗諸侯が一堂に会する機会、すなわちシュパイヤー大聖堂の献堂式を急いだのだと思われる。この時代、献堂式が政治的に利用されることも多く、献堂年は教会堂が完成した年と必ずしも一致しない。シュパイヤー大聖堂が実際に完成したと考えられる1106年までの45年間、ザクセン反乱や叙任権闘争など、内乱や戦争が相次ぎ、工事が幾度も中断したという記録が残されている⁹⁾。

したがって、ハインリヒ4世は、第1次シュパイヤー大聖堂を改築し、「新たに」第2次大聖堂を建設したのではなく、先代からの建設工事を継承し、これを完成させたのだと考えられる。つまり、シュパイヤー大聖堂の建設年代は、1030年頃から1106年にかけてであり、1040年代半ばに大幅な設計変

更が行われ、これに伴って、初期ロマネスク様式から漸次的に盛期ロマネスク様式へと移行していった、と考えるべきであろう。

1.3 ストウリ公会議後の技術革新と様式的変遷

ハインリヒ3世の強大な政治力は、1040年代を境として、荒石の壁から切石の壁への変化をもたらした。これは壁画装飾から浮彫装飾への移行をうながしていた。また、巨大なピア（支柱）の周りには垂直方向に引き延ばされた半円柱が付けられた。これは、壁面が水平方向に分節されていた初期ロマネスク聖堂に対し、盛期ロマネスク建築の垂直性を強調した壁面構成を先駆している。また、ハインリヒ3世時代の壁体は、事実として、石造のヴォールトを支えており、フランツ・クリムが論じたように、1056年以前に、身廊に石造ヴォールトを架構する意図があったという可能性も指摘できる¹⁰⁾。

ハインリヒ3世の時代には、こうした工法・様式上の変化に加え、皇帝主導の教会改革、皇帝の神格化に対応し、西正面に西構え（ヴェストヴェルク）が建設された。西構えの1階はナルテクス、2階部分は皇帝の間として使用されていたと推察され、身廊に向けて開口していた。そして、皇帝は一段高いところに座し、教会の守護者としてミサに参列、君臨していたと考えられる。シュパイヤー大聖堂の西構えは、プファルツ継承戦争の後に破壊され、現存しないが、17世紀の複数のデッサンにより、その詳細を知ることができる。17世紀のデッサン（図3）が示す通り、西構えは下部が切石の整層積み、上部は側廊側壁と同様、荒石の上にモルタル・漆喰の上塗りを施して仕上げられていたと考えられる。したがって、1081年頃から1088年に位置づけられている東側ファサードよりも古く、1046年頃から1061年頃に位置づけられる。しかし、西構え上端部の小型ギャラリー（ツヴェルクギャラリー）は、1081年以降に付け足されたものとされている。小型ギャラリーと呼ばれる装飾的建築要素はハインリヒ4世の代にロンバルディア地方からもたらされたものだ、とする説が根強いからであろう。



図3 シュパイヤー大聖堂の西構え、ケルン、ヴァルラフ＝リヒャルト美術館所蔵、作者不詳、1606年のデッサン

2. 小型ギャラリーとロンバルディア起源説

2.1 ツヴェルクギャラリーとロマネスク建築の起源

小型ギャラリー（ツヴェルクギャラリー）は、ドイツ語の「Zwerg」、英語では「dwarf」という語を冠し、古代ローマの威風堂々としたギャラリーに比べ、矮小であるという否定的な意味が込められている。日本語訳としては、「小人ギャラリー」という直訳と、ここから否定的な意味を取り除いた「小型ギャラリー」という訳があるが、本稿では後者を採用した。

また、この小型のギャラリーは、構造上の制約から、常に屋根および軒の近くに配されるため、英語圏では「イーヴズ eaves・ギャラリー」、すなわち軒ギャラリーという術語を用いる研究者もいる。

一般に、ロマネスク様式は北イタリア、ロンバルディア地方が起源であると言われ、小型ギャラリーは、盛期ロマネスク、ロンバルディア様式であることを判別する様式史上の指標の一つとされている。北イタリアでは12世紀前半に現れた。しかし、11世紀半ばに、既にライン川流域において小型ギャラリーが現れていたのなら、ロンバルディア様式がラインラントに伝播したという説は成り立たな

い。未来から過去への様式伝播などあり得ないからである。筆者はシュパイヤー大聖堂の小型ギャラリー（図4）が、ロンバルディア様式を受容したことの証左であるというクーバッハ等の説を否定する。そして、これがライン川流域で独自に発展した建築要素であるという説を提示したい。その根拠は、様式史的な視点、すなわち形態上の類似という問題ではなく、建築図像学上の考察に基づくものである。つまり、小型ギャラリーには宗教上・政治上の機能があり、象徴的な意味を担っているのだと推察される。単に見た目が美しいというデザイン性の問題だけではない。



図4 シュパイヤー大聖堂 身廊外壁の小型ギャラリー 円柱の
高さは約2.1メートル

2.2 クーバッハによるロンバルディア起源説

1972年、ハンス・エリッヒ・クーバッハは、シュパイヤー大聖堂の小型ギャラリー（図5）がロンバルディア起源の建築要素であると論じた。そして、1982年には、「小型ギャラリーの起源について」という論文¹¹⁾を著し、小型ギャラリーの起源がニッチ列であると結論した。両者を併せて判断するならば、まず、北イタリアにおいて、アプシス外壁に配されたニッチ列が小型ギャラリーへと発展し、次に、それが他の地方へ伝播した、ということになる。以下、クーバッハの考察を簡潔にまとめる¹²⁾。

第1期、9世紀または10世紀、アッリアーテのサン・ピエトロ聖堂のように、簡素なシリンダー型アプシスの上端部に、内部に向けて開口しない壁龕、すなわちニッチが現れた。そして、薄い柱状の帯（リゼーネ）、いわゆる柱形がニッチ列を3つずつ分節していた。第2期は、10世紀、ミラノのサンタンブロージオ聖堂（図6）がそうであるように、柱形の上部が小さな半円アーチのフリーズ、小型ブラインド・アーチで連結され、これがニッチ上端部を縁取るようになる。やがて、小型のブラインド・アーチに拍車状の飾りが付けられるようになった。これらのニッチは採光のために作られた窓とは異なり、実用上の機能はなかったと思われる。小型ギャラリーのように歩廊として用いることができない。第3期になると、ニッチ同士を隔てる壁の前面に、半円柱が付けられ、外観上、小型ギャ

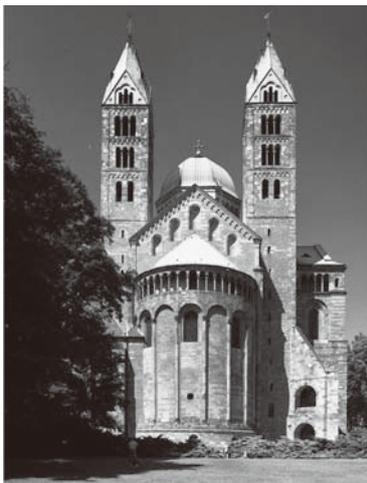


図5 シュパイヤー大聖堂、東側外観、アプシス上端部の小型ギャラリー、1080年頃-1088年頃



図6 ミラノ、サンタンブロージオ聖堂のニッチ列、940年頃/10世紀後半

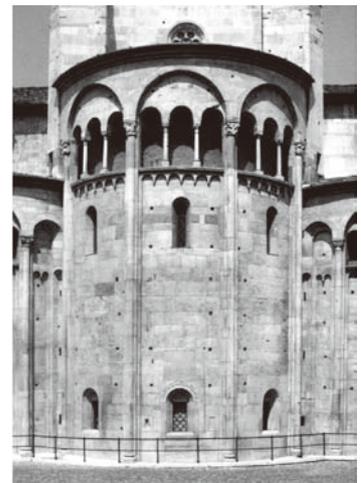


図7 モデナ大聖堂の小型ギャラリー、12世紀前半（1099年起工、1184年献堂）

ラリーとの区別が難しくなっている。南フランス、サン・ギレム・ル・デゼール修道院聖堂などが好例である。そして、第4期の作例では、半円柱の背後にある壁が徐々に取り除かれ、ほぼ独立した円柱が一つおきに配されるようになった。クーバッハは作例として、サン・コスタンツォ・アル・モンテ聖堂を挙げている。さらに、第5期、12世紀前半、カステル・アルクァートのアプシスのように、半円柱の背後の壁は二つおき、あるいは三つおきとなり、小型ギャラリーとの形態上の類似性が著しい。そして、第6期、ついに全ての壁が取り除かれ、ニッチ列から小型ギャラリーへの移行が完了した。モデナ大聖堂（図7）東正面中央のアプシスでは、円柱の背後に壁はなく、もはやニッチと呼ぶことはできない。この変化は、12世紀前半に起こったと考えられ、モデナ大聖堂では、副祭室は第5期の擬似的小型ギャラリーが用いられているのに対し、中央のアプシスでは背後に一切壁のない「真の小型ギャラリー」が用いられている。

一読して誰もが納得し得る、整然とした論考であり、一定の説得力がある。しかし、個々の建築の建設年代を調べてみると、実際には、このように順序よく変化していないことがわかる。例えば、モデナ大聖堂は、1099年が起工年と考えられているため、小型ギャラリーが現れるのは12世紀前半ということになるだろう。しかし、シュパイヤー大聖堂のアプシスは、1088年には完成していたとされており、ライン川流域からロンバルディアへの伝播を考えることはできても、その逆はあり得ないということになる。したがって、現在のクロノロジーを支持する限り、ロンバルディア起源説は成立しない。10年、あるいは20年ほどの差であるならば、ロンバルディアにおいて、現存しない未知の先行作例があったと仮定することもできる。しかし、その差が50年から60年だとしたら、もはやクーバッハ説は成り立たないのではないだろうか。次節では、ライン川流域ではロンバルディア地方よりも半世紀以上早く、1040年代から小型ギャラリーが導入されていたという事実を指摘する。

3. 歩廊としての機能と聖遺物崇敬

3.1 トリーア大聖堂とギュンター・カール説

本章では、まず、ハンス・エリッヒ・クーバッハによって否定され、忘却された感のあるギュンター・カールの説を取り上げ、その上で筆者の自説を展開する。

1936年に発表されたカールの学位論文¹³⁾では、ドイツ・ロマネスクの小型ギャラリーが、ロンバルディアのニッチ列から発展したものではなく、トリーア大聖堂西正面の小型ギャラリー（図8、9）を起源とする、という説が提示されていた。そして、さらに遡れば、トリーアの都市門であるポルタ・ニグラ（図10）や、シリアの初期キリスト教聖堂における階上ギャラリーと密接な関連性を持つ、と主張していた。これに対し、クーバッハは、先述の論文において、カールの説を以下の論理で一蹴している。「ギュンター・カールの比較は有効ではない。なぜなら、見張りや防御などの実際上の機能を有するギャラリーと、単なる装飾に過ぎないロマネスクの小型ギャラリーでは、役割が全く異なるからである。また、ロマネスク聖堂の小型ギャラリーと、ポルタ・ニグラのギャラリーでは、形態が大きく異なり、似ていない。都市門と教会堂を同列に論ずるのは不適切である¹⁴⁾。」しかし、クーバッハは、以下の事実を見落としていると思われる。トリーアのポルタ・ニグラは、11世紀の半ばには、都市の門ではなく、教会堂として改築されていたのである（図11）。そして、もともとあった哨戒用のギャラリーに連続させ、12世紀頃、小型ギャラリーを設けた祭室が増築された。したがって、トリーア大聖堂に設けられた1046年頃の小型ギャラリーが、同じ街の古代ローマ建築の影響を受けたものだというカール説は妥当性が高い。



図8 トリーア大聖堂、西側外観、1046年頃



図9 トリーア大聖堂西正面の小型ギャラリー、1046年頃



図10 トリーア、ポルタ・ニグラ、古代ローマ時代（3世紀末頃）建設。左端の突出部はロマネスク期の増築部分



図11 トリーア、ポルタ・ニグラ、バロック期の銅版画。ロマネスク期（11世紀）に教会堂に改築された

3.2 小型ギャラリーに関する構造上の問題

クーバッハは、比較の精度を高めるため、考察の対象をアプシス上端部の小型ギャラリーに限っていたようである。確かに、様式上の比較としては正しいかもしれないが、構造の問題を考える上では不十分である。アプシスの壁体は、通常、上部で半円蓋を支えている。積雪がある地方ではこの半円蓋に接するようにして木材で円錐形の屋根を作らなければならない。この際、半円蓋とアプシス外壁の接点よりも上の部分に、木造の屋根を支える構造が必要となる。この部分は木造の屋根の荷重を支える壁なので、石造の半円蓋を支えている部分よりも薄い壁で構わない。それゆえ、石材の節約と装飾を兼ね、半円蓋から生ずる力の作用点（図12の点A）よりも上の部分に、ニッチ列や小型ギャラリーを配することができる。構造上の制約をほとんど受けない部分を利用しており、作用点より下の部分に配することは難しい。もし無理に配すれば、その部分は構造上の弱点とな

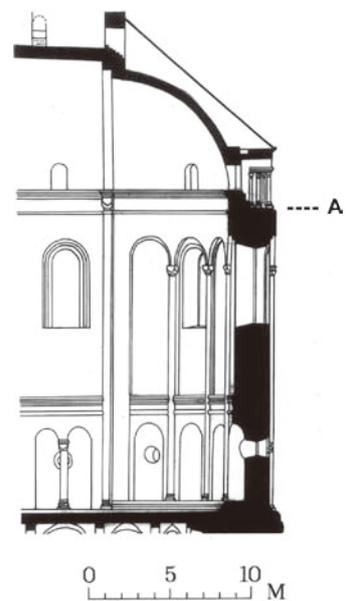


図12 シュバイヤー大聖堂のアプシス、断面図、筆者作成

り、半円蓋の荷重を支えきれなくなる可能性があるためである。そのため、アプシスのニッチ列や小型ギャラリーはどれも小さく、どの教会堂でも比例関係がほとんど同じになってしまう。アプシス上部だけを見れば、ニッチ列と小型ギャラリーが似てくるのは構造上、当然のことだと言えるだろう。

他方、身廊側壁の小型ギャラリーの場合、構造の観点から見れば、アプシスのギャラリーとは全く事情が異なる¹⁵⁾。例えば、シュパイヤー大聖堂の場合、小型ギャラリーが配された部分は、身廊の石造ヴォールト（図13、14）から生ずる巨大な力を支持する役割を担っている。木造屋根の荷重のみを支えるアプシス上端部のものとは異なる。石造ヴォールトの荷重は主に点D・点Eの部分が支えている（図16）。しかし、シュパイヤー大聖堂で用いられたドーム状の交差ヴォールトは、点Bより下の部分にも力がかかってしまう。したがって、石造天井からくる重みが身廊の側壁を押し広げ、ヴォールトが崩落するという事故を防ぐには、点Bより下の部分を密な構造にした方が有利であると考えられる。（図15）ところが、シュパイヤー大聖堂の建築家は、構造上の役割を担っているこの壁を、およそ半分の厚みにしてしまった。小型ギャラリーが象徴的意味や特別な機能を持たない、単なる装飾であるならば、強度を犠牲にしなければならない必然性があるだろうか。サン・ギレム・ル・デゼール修道院聖堂¹⁶⁾のように、半円柱の背後に壁を設け、ニッチ列によって装飾したならば、それはバットレスとして機能するため、小型ギャラリーよりは明らかに強い構造となる。構造上の危険を冒して、ここに小型ギャラリーを配したのはなぜか。筆者は、こうした小型ギャラリーが、単なる装飾的要素ではなく、実用上の機能、宗教的・政治的目的を有する「歩廊」であったからだと考える。歩廊としての動線が設定されているため、構造上の無理をして、身廊側壁を穿ち、小型ギャラリーを建築全体にめぐらせたのではないかと推察する。

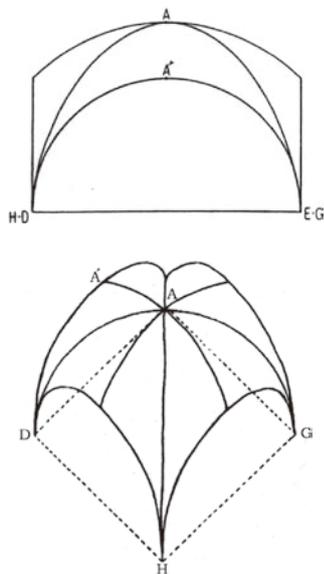


図13 ドーム状交差ヴォールトの断面図（上）

図14 ドーム状交差ヴォールトの説明図（下）



図15 身廊側壁に小型ギャラリーを設けなかった場合の断面

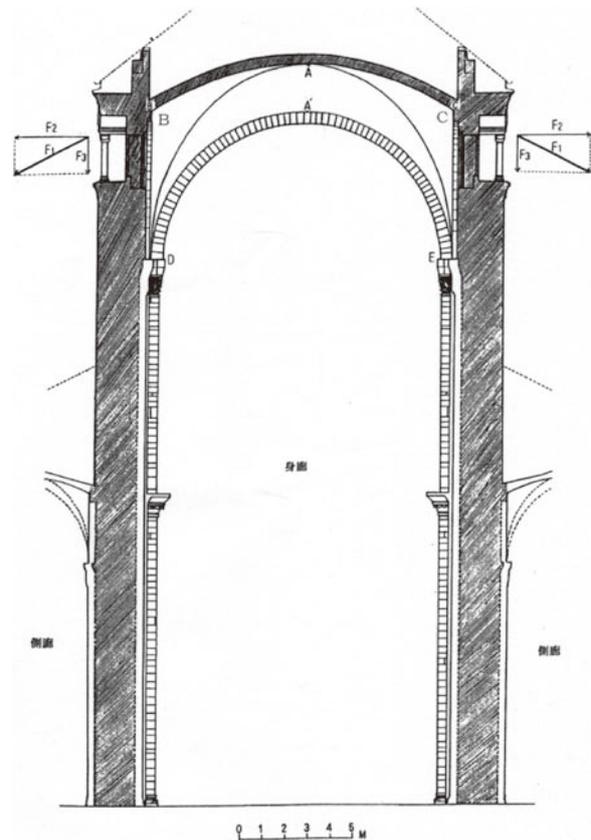


図16 シュパイヤー大聖堂身廊の断面図

3.3 小型ギャラリーにおける「聖遺物の顕示」の儀式

シュパイヤー大聖堂の小型ギャラリーは、「ツヴェルク」すなわち「小人の」ギャラリーと呼ばれてはいるものの、実際には「大人の」人間がこの部分を歩くことができるように設計されている。円柱の高さは約2.1m、ギャラリーの奥行きは約90cmである。二人がすれ違うのは難しいが、一方通行の歩廊として用いるには十分な高さと幅が考慮されている¹⁷⁾。シュパイヤー大聖堂の身廊外壁に配された小型ギャラリーは、この建築の全体にあたかも王冠のようにギャラリーをめぐらせ、歩廊として用いるという構想に基づいているのであろう¹⁸⁾。西構えと東側内陣にある小型ギャラリーが身廊部の小型ギャラリーによって連結されている。そして、地上に降りることなく大聖堂の環状の小型ギャラリーを一周めぐり歩くことができる。これは、ギャラリーレベルの水平方向断面図において明らかである¹⁹⁾。また、シュパイヤーの小型ギャラリーには、柱の内側、ちょうど目の高さに浮彫を施した例があり、実際に歩廊として利用されていた可能性が示唆されている²⁰⁾。このように、小型ギャラリーは、実際に歩行して何らかの儀式を行う、歩廊としての機能があったと考えられるのに対し、ニッチ列の場合、壁によって隔てられ、歩行することは不可能である。したがって、形態の類似を指摘することはできるが、宗教上・政治上の機能の点では全く異なる要素だと言える。

それでは、小型ギャラリーは一体何の用途に用いられていたのだろうか。いくつかの可能性が考えられるが、中世末期、15世紀頃には、このギャラリーは特定の宗教儀式、すなわち聖遺物を顕示するために用いられていたことが指摘されている²¹⁾。マーストリヒト、シント・セルヴァティウス聖堂(図17)の東側外観は、シュパイヤー大聖堂の東側ファサードと酷似している。この聖堂のアプシスの小型ギャラリーを表した15世紀の木版画が現存し、小型ギャラリーにおいて聖遺物を顕示する場面が描かれている(図18)。

トリーア大聖堂、西正面のアプシスで聖遺物を顕示している場面(図19)を描いた木版画も存在する²²⁾。トリーア大聖堂の西側ファサード(図8)は、窓が2段になっているように見えるが、下の3つが窓であり、アプシス上端部にある6つの開口部は採光の役割を果たしてはいない。最上段の開



図17 マーストリヒト(オランダ)、シント・セルヴァティウス修道院聖堂のアプシス、12世紀

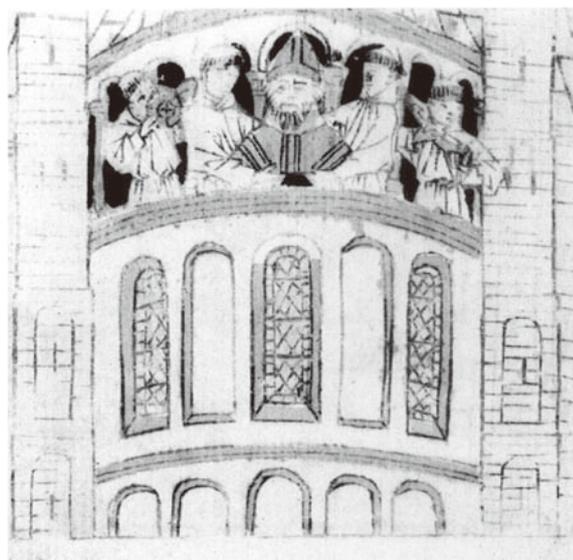


図18 マーストリヒト、シント・セルヴァティウス修道院聖堂のアプシス(12世紀)、小型ギャラリーにおける「聖遺物の顕示」、15世紀の木版画(1460年頃)、Koninklijke Bibliotheek Albert I in Brussels, Prentenkabinet hs.18972.

口部背後の空間は、歩廊としての機能を有している。そして、中世末期には、アプシス最上段の開口部の外側にトリビューンを設け、そこで聖遺物を顕示していた。トリビューンへは階段塔から登っていくことになるが、その際、アプシスと階段塔の間の壁面、西正面入り口上部の小型ギャラリーを歩いていったと考えられる。これは、聖遺物の顕示の際、聖職者が列をなして行進し、儀式の劇的効果を高めるためであったと推察される。これらの木版画は15世紀、16世紀に描かれたものであり、11世紀において、既に小型ギャラリーが聖遺物の顕示に用いられていたという証拠にはならないが、小型ギャラリーが単なるデザイン上の理由から導入された装飾ではなく、建設当初から歩廊としての機能を有していたという可能性を強く示唆しているのは明らかである。以上のように、小型ギャラリーの歩廊としての機能を重視すると、定説化しているロンバルディア起源説はもはや支持することができない。カールのトリーア起源説は、形態の類似という観点から考察していたため、ニッチ列との区別が曖昧であったが、筆者は歩廊としての機能、そして後述するように「象徴的意味」という独自の観点から考察し、カールのトリーア起源説を支持する。したがって、ドイツにおける小型ギャラリーの発生は、1046年頃、11世紀半ばにまで遡ることになる。

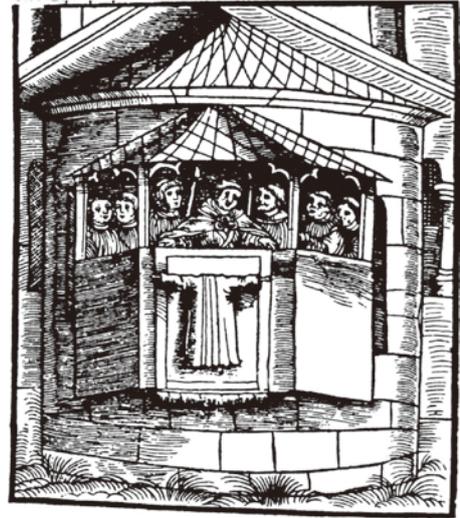


図19 トリーア大聖堂、西側アプシス、1513年の木版画、聖Rockの聖遺物を顕示する聖職者たち
Staatsbibliothek München

4. 小型ギャラリーの象徴的意味

4.1 皇帝崇拜との関連性

現時点では11世紀における小型ギャラリーの宗教上、あるいは政治上の機能は特定できていない。しかし、もし聖遺物の顕示が建設当初の目的ではないとするならば、時代背景から考えて、ハインリヒ3世が導入しようとしていたと考えられる「皇帝崇拜」の儀礼との関連性が指摘できる。すなわち、皇帝とその一族、側近が、国内の諸都市を訪れるとき、「アドヴェントゥス・アウグスティ」という皇帝讃頌の儀式が行われていた可能性がある。古代ローマでは、皇帝が教会堂を訪れるとき、聖職者たちが整列し、頌歌をもって迎えた。E. ボルドウィン・スミスによれば、これは古代オリエントの神格化された王の称賛、古代ローマ時代の皇帝崇拜にまで遡り、聖なる宮殿や都市の門で行われていた儀式である²³⁾。

例えば、トリーアの金貨（図20）では、ロンドンの擬人像が片膝をつき、コンスタンティヌス・クロルス帝を双塔式の都市門の前で迎えている。実際には市民が音楽や歓呼の声をもって皇帝を迎え入れたのであろう。そして、市門をくぐり抜けた皇帝は、今度は門の上に上り、ギャラリーもしくはトリビューンから臣下や市民に謁見したと言われている。

このような儀式が、都市の門や宮殿で頻繁に行われていたため、階上のギャラリーは特別な意味、政治・宗教上の役割を担うようになったと考えられる。すなわち、神や皇帝の「顕現（イビファニー）」の場である。これが後には普及して、貴人の邸宅に設けられた2階のギャラリー、あるいはバイユーのタペストリー（図21）のように、宮殿建築の象徴的要素として用いられるようになった。スミスの説に立脚すると、シュパイヤーの西構え（図3）は、天上のエルサレムの模像としての教会堂に入



図20 トリーアの金貨《ロンドン市に迎え入れられるコンスタンティウス・クロールス帝》トリーア、ラインラント州立博物館蔵、4世紀初頭、トリーアで鑄造、馬上のコンスタンティウス・クロールス帝が、ロンドン市の擬人像から歓迎を受ける様子



図21 バイユのタペストリー《ハロルドとウィリアムの交渉》1077-1082年 2本の円柱によって支えられる小型のギャラリーは「宮殿」を表している

るための一種の都市門であり、同時に皇帝の間がある聖宮殿だということができる。ここに「神・皇帝の顕現」の場として小型ギャラリーを設置することは、政治上の機能、象徴的意味の点では必然性があったと言える。

4.2 小型ギャラリーと霊廟建築

シュバイヤー大聖堂の身廊東端部には「皇帝墓所」、内陣には「聖遺物の安置場所」があった。それゆえ、東側ファサードにも「神性」や「顕現」を象徴する小型ギャラリー（図22）が設置され、それは皇帝への死者崇拜、「神および皇帝の顕現」という象徴的意味を担っていたのではないかと推察される。11世紀には、まだ聖遺物の顕示という儀式は行われていなかった可能性もあるが、小型ギャラリーが「顕現」の場であるという象徴的意味は建設当初からのものであったと考えられる。小型ギャラリーはおそらくこのような象徴的意味を担っていたため、霊廟建築において好んで用いられたのであろう。古代ローマの皇帝廟、例えばハドリアヌス帝のマウソーレーウムやトンポー・ド・ラ・クレティエンヌの廟（図23）、あるいはゲルマン人の王墓、テオドリクス廟（図24）などが代表的な作例である。また、霊廟を環状に取り巻く、環状円柱列との関連性も指摘できる。そして、このような象徴的建築要素は、皇帝の側近の墓、例えばマインツ大聖堂の二重礼拝堂、シュヴァルツラインドルフの二重礼拝堂などへと受け継がれていった。

以上のように、ロマネスクの小型ギャラリーは、市門や聖宮殿の階上ギャラリー、霊廟建築の環状ギャラリーなどと密接な結びつきがあり、いずれも「神・皇帝の顕現」という象徴的意味を担っていたと考えられる。



図22 シュバイヤー大聖堂、アプシスの小型ギャラリー、11世紀



図23 アルジェリア、トンボー・ド・ラ・クレティエンヌの廟、1世紀



図24 ラヴェンナ、テオドリクス廟、復元図、5世紀末

おわりに

最後に、本稿で提示した筆者の説についてまとめる。まず、シュバイヤー大聖堂が1061年以降に破壊され、1080年代以降に再建されたとする説は誤りであると考えられる。1061年の献堂式はハインリヒ3世の急逝後、わずか6歳で即位したハインリヒ4世の治世を安定させるための政治的なセレモニーであり、実際には長い中断の後、ハインリヒ4世が成人してから完成に導かれたと考えられる。したがって、ラインラントにおける盛期ロマネスク様式の発生は、定説では1080年代だが、実際には1040年代半ばであり、1046年頃、ハインリヒ3世による皇帝墓所（王の内陣）の設置を端緒とするという仮説が成り立つ。そして、問題の小型ギャラリーは、歩廊としての機能を重視して導入された要素であり、トリーア大聖堂西正面のものが最初期の作例だと言える。また、小型ギャラリーはこれまで単なる装飾として扱われ、ロンバルディア・ロマネスクの影響を示すデザイン的要素であると考えられてきた。しかし、ロンバルディアでの小型ギャラリーの使用が12世紀に入ってからであることを考えると、11世紀中頃に建設されたトリーア大聖堂に影響を与えたと考えすることはできない。シュバイヤー大聖堂の小型ギャラリーも11世紀中頃に構想され、内乱による中断を経て、11世紀後半に完成したと考えられる。そして、神聖ローマ帝国の小型ギャラリーが特定の政治上の機能、すなわち皇帝崇拜、あるいは、聖遺物の顕示の場として宗教上の機能を有していたという可能性を指摘した。また、小型ギャラリーは、「神・皇帝・貴人の顕現 (Epiphany)」の場としての象徴的意味を有していたと推察される。

シュバイヤー大聖堂には「西構え (ヴェストヴェルク)」と言われる構築物があり、身廊に接して「皇帝の間」があった。残念ながら西構えは現存しないが、ほぼ同じ規模で19世紀に再建されている²⁴⁾。この部分は宮殿建築のように「謁見の間」として用いられていた可能性が高く、小型ギャラリーとともに皇帝の権威を高めるための政治上の意味を担っていたと考えられる。シュバイヤー大聖堂の西構えについては、稿を改めて論じたい。

付記

本稿は以下の口頭発表の発表原稿に加筆修正を加えたものである。「シュバイヤー大聖堂の小型ギャラリー—歩廊としての機能について—」美学会第57回全国大会研究発表（於：大阪大学）、2006年10

月。「ロマネスク建築の起源について—神聖ローマ帝国とロンバルディア—」玉川大学学術研究所人文科学研究センター公開研究発表会、2019年6月。ご助力、ご助言を頂いた皆様に、心より感謝の意を表します。

注

- 1) BRESSLAU, H. (Hrsg.): Vita Bennonis Episcopi Osnabrugensis, in: Monumenta Germaniae Scriptores rerum Germanicarum in usum scholarum, Hannover-Leipzig 1902; TANGL, M.: Das Leben des Bischofs Benno II. von Osnabrück, Leipzig 1910; HAACKE, R.: Das Leben Bennos, Bischofs von Osnabrück und Gründers unseres Klosters, in: Iburg. Benediktinerabtei und Schloß, hrsg. v. der Stadt Bad Iburg, Bad Iburg 1980, pp. 57–137.
- 2) A. Schwartzenger: Der Dom zu Speyer das Münster der fränkischen Kaiser, Neustadt a. d. Haardt 1903, p. 70.
- 3) KUBACH, Hans Erich/Walter Haas: Der Dom zu Speyer, (Die Kunstdenkmäler von Rheinland-Pfalz Bd. V.), 3 vols., München/Berlin 1972, pp. 704–707.
- 4) 小倉康之「第二次シュバイヤー大聖堂のアプシスと霊廟建築」美学会編『美学』第53巻第4号(212号)、2003年、42–55頁(= The Apse of the Second Building Phase of Speyer Cathedral and Sepulchral Architecture, in: Aesthetics, 12 (2006), edited and published by The Japanese Society for Aesthetics, pp. 81–94.) シュミットによる1932年の調査については以下を参照。SCHMITT, Max: Die Sicherungen des Speyerer Domes im 18. und 20. Jahrhundert, Speyer 1932.
- 5) 筆者はDwarf gallery (Zwerggalerie)を「小人ギャラリー」と直訳せず、「小型ギャラリー」と呼ぶ。
- 6) 小倉康之「シュバイヤー大聖堂—ザリエル朝皇帝権によるローマ建築の復興—」日本歴史文化学会編『風土と文化』第4号、2003年、1–10頁。
- 7) 本稿ではこの説を「ロンバルディア起源説」と呼ぶ。主要な文献は以下の通り。RIVOIRA, Giovanni Teresio: Le Origini Della Architettura Lombarda E Delle Sue Principali Derivazioni Nei Paesi d'Olt'alpe, 2 vols., Rome 1901; PUIG I CADAFALCH, J. et al.: L'arquitectura romànica a Catalunya, 3 vols., Barcelona 1909–1918; KUBACH, Hans Erich/Albert Verbeek: Romanische Baukunst an Rhein und Maas. Katalog der vorromanischen und romanischen Denkmäler, Bd. I–III, Berlin 1976 (Bd. IV, Neuss 1988).
- 8) 小倉、前掲「第二次シュバイヤー大聖堂のアプシスと霊廟建築」、44–48頁。
- 9) Ebbonis vita Ottonis episcopi Babenbergensis, in: MG. SS. XII, 825. 原文は以下の通り。

Eo tempore gloriosissimus imperator Heinricus magnum illud et admirabile Spirensis aecclesiae aedifici;tm ob venerationem perpet;tae virginis Mariae, cuitts specialis ahtmpnus futit, regali magnificentia exstruebat. Sed magistri operis fratrdulenter et sine dei timore agentes magnam pecuniae quantitatem sttis; tsibtes inswaebant, ita ut freqteenter ad opus tam mirificum pecunia ipsa deficeret. Unde augustus non mediocri dolore permotus, ex consultis accito familiari aurictdario suo Ottone, ei tocius operis magisterium commisit, utpote cuius sapientia ctmtctis probata, eciam ad maiora quaeque et ardua dispensanda esset idonea. Qtd sagaciter et provide commisso operi latendens - sciebat enim iuxta apo-stolicum mandatum dominis carnalibus sic quasi deo serviendam - frequenter ad curtem regiam regressus, pecuniam, quae supererat statuto operi, fideliter ei resignabat. Instrper ad indicitem ingeniosae diligentiae suae aeqtam fenestrarum aecclesiae mensuram pnrden-ter a se dispositam imperatori considerandam offerebat. Pro qua sincerissimae fidei constancia non solum regi sed et cunctis optimatibus ita se acceptum reddidit, ut deo gratias agerent,

quod ad eius noticiam pervenissent.

- 10) KLIMM, Franz: Der Kaiserdom zu Speyer, Speyer 1953, p. 15.
- 11) KUBACH, Hans Erich: Zur Entstehung der Zwerggalerie, in: Kunst und Kultur am Mittelrhein (Festschrift für Friz Arens zum 70. Geburtstag), Worms 1982, pp. 21-26.
- 12) クーバハの「小型ギャラリーの起源について」の内容については、以下の論文において6段階全て図版を付けて説明した。本稿では紙面の都合により、図版は一部省略している。以下を参照。小倉康之「リポイのサンタ・マリア修道院聖堂—アプシス壁面構成に関する考察—」スペイン・ラテンアメリカ美術史研究会編『スペイン・ラテンアメリカ美術史研究』第5号、2004年、1-9頁。
- 13) KARL, G.: Die Zwerggalerie in der deutschen Baukunst, Diss., Bonn 1936. (=Als Buch: Die Zwerggalerie. Herkunft, Entwicklung und Verbreitung einer architektonischen Einzelform der Romanik, Würzburg 1939.)
- 14) Kubach, 1982, p. 21.
- 15) 構造上の問題については以下を参照。小倉康之「シュパイヤー大聖堂の交差ヴォールト」『横浜美術短期大学教育・研究紀要』VOL.03、2007年、70-73頁。小倉康之「シュパイヤー大聖堂の研究」東京藝術大学博士論文、2001年、143-148頁。
- 16) Kubach, 1982, p. 23.
- 17) WEINDEL, Philipp: Der Dom zu Speyer. Geschichte · Beschreibung, 6. Aufl., Speyer 1990.
- 18) 小倉、前掲「シュパイヤー大聖堂の研究」、149-153頁。
- 19) Kubach/Haas, 1972, Tafelband, Tafel 6-7.
- 20) Kubach/Haas, 1972, Bildband, Fig. 1009.
- 21) HARTOG, E. Den: Romanesque Architecture and Sculpture in the Meuse Valley, Mechelen 1992, pp. 58-63; ROGER, Stalley: Early Medieval Architecture, Oxford University Press, Oxford 1999, pp. 197-198; OS, Henk van: Der Weg zum Himmel. Reliquienverehrung im Mittelalter, Regensburg 2001, pp. 77-90.
- 22) IRSCH, Nikolaus: Der Dom zu Trier, Düsseldorf 1931, p. 17.
- 23) SMITH, E. Baldwin: Architectural symbolism of imperial Rome and the middle ages, Princeton 1956. (=E. ボルドウィン・スミス『建築シンボリズム—帝政ローマと中世における—』河辺泰宏他訳、中央公論美術出版、2002年)
- 24) 現在、皇帝の間の開口部はパイプオルガンで塞がれているため、元来の政治的機能がわからなくなっている。以下を参照。小倉、前掲「シュパイヤー大聖堂の研究」、56-57、61-62頁。

図版出典

図1：筆者撮影 図2：KLIMM, Franz: Der Kaiserdom zu Speyer. Zum Jubiläum 630-1030-1930, Speyer 1930.
図3：KUBACH, Hans Erich/Walter Haas: Der Dom zu Speyer (Die Kunstdenkmäler von Rheinland-Pfalz Bd. V), 3 Bde., München/Berlin 1972. 図4、22：WEINDEL, Philipp: Der Dom zu Speyer. Geschichte · Beschreibung, 6. Aufl., Speyer 1990. 図5：松本智勇氏撮影 図6：CHIERICI, Sandro: Romanische Lombardei, Würzburg 1978. 図7：BARRAL I ALTET, Xavier: The Romanesque. Towns, Cathedrals and Monasteries, Köln 2001. 図8、9：RONIG, Franz: Der Dom zu Trier, Königstein im Taunus 1982. 図10：BARRAL I ALTET, Xavier: The Early Middle Ages. From Late Antiquity to A.D.1000, Köln 2002. 図11、19：IRSCH, Nikolaus: Der Dom zu Trier. Die Kunstdenkmäler der Rheinprovinz, Düsseldorf 1931. 図12-16：筆者作成 図17、18：HARTOG, E. Den: Romanesque Architecture and Sculpture in the Meuse Valley, Mechelen 1992. 図20：ラスツツィオ・ビアンキ=バンディネルリ『古代末期の美術（人類の美術、18）』吉村忠典訳、新潮社、1974年。 図21：TOMAN,

Rolf: Die Kunst der Romanik. Architektur · Skulptur · Malerei, Köln 1999. 図23 : KRAUS, Teodor: Das Römische Weltreich, Propyläen Kunstgeschichte II., Berlin 1967. 図24 : KAHL, Günther: Die Zwerggalerie in der deutschen Baukunst, Diss., Bonn 1936.

参考文献

- BANDMANN, Günter: Mittelalterliche Architektur als Bedeutungsträger, Berlin 1951 (10. Aufl. 1994).
- BANDMANN, Günter: Zur Bedeutung der romanischen Apsis, in: Wallraf-Richartz-Jb.15, 1953, 28-46.
- BINDING, Günther: Bischof Benno II. von Osnabrück als «architectus et dispositio caementarii operis, architectoriae artis valde peritus», in: Zeitschrift des deutschen Vereins für Kunstwissenschaft 44, 1990, 53-66.
- HAAS, Walter: Der Dom zu Speyer, Königstein in Taunus 1988.
- JÖCKLE, Clemens: Benno von Osnabrück, in: Jahrbuch des Vereins für christliche Kunst in München E.V. 17, München, 1988, 87-100.
- JÖCKLE, Clemens: Speyer Cathedral, München/Zürich 1992.
- KLIMM, Franz: Der Kaiserdom zu Speyer. Speyer 1953.
- KUBACH, Hans Erich: Der Dom zu Speyer, 1. Aufl., Darmstadt 1974. (4., von Günther Binding erg. Aufl., Darmstadt 1998.)
- KRAUTHEIMER, Richard: Studies in early christian, medieval, and Renaissance art, New York 1969.
- LEHMANN, Edgar: Die Bedeutung des antiken Bauschmucks am Dom zu Speyer, in: Zeitschrift für Kunstwissenschaft 5, 1951, 1-16.
- LUTZ, Karl: Die Saliergräber im Speyer Dom, in: Pfälzer Heimat 2, 1951, 76-77.
- MÖLLER, Carl: Benno von Osnabrück als Architekt, Osnabrück 1988.
- NEUENSCHWANDER, Brody: The Art History of Speyer, Diss., London 1986.
- NORBERT ABT VON IBURG (übersetzt von Michael Tangl): Das Leben des Bischofs Benno II. von Osnabrück, Leipzig 1910.
- NORBERT VON IBURG (neugefaßt von Rhaban Haacke): Das Leben Bennos, Bischofs von Osnabrück und Gründers unseres Klosters, in: Iburg. Benediktinerabtei und Schloß, hrsg. v. der Stadt Bad Iburg, Bad Iburg 1980, 57-137.
- POTENLÄNGER, Franz Xaver/Günter Stein: Der Dom im Bild, in: Ausstellungen zum Domjubiläum, Speyer 1980, 9-85.
- POPPE, Roswitha: Das Grab und die Gedächtnisstätten Bennos II. in der Klosterkirche, in: Iburg. Benediktinerabtei und Schloß, hrsg. v. der Stadt Bad Iburg, Bad Iburg 1980, 247-254.
- SAUERLÄNDER, Willibald: Cluny und Speyer, in: Investiturstreit und Reichsverfassung, hrsg. v. Josef Fleckenstein, Sigmaringen 1973, 9-31.
- SCHMITT, Max: Die Sicherungen des Speyerer Domes im 18. und 20. Jahrhundert, Speyer 1932.
- SCHWARTZENBERGER, Albert: Der Dom zu Speyer das Münster der fränkischen Kaiser, Neustadt a. d. Haardt 1903.
- WINTERFELD, Dethart von: Die Kaiserdome Speyer, Mainz, Worms und ihr romanisches Umland, Würzburg 1993.